

鮮やかな記憶

長嶋公榮

木製の古びた食卓にご飯を盛った茶碗、汁椀と漬け物の皿、それに生卵が置かれていた。「いただきます」

矢野花枝は合掌してそう呟く。夫の邦夫が二年前に九十二歳で他界してからは、ずっとひとり暮らしをしているが八十八になった今は寂しさがつのる。夫に食べさせるべく料理をしていた頃は、手間暇かけて野菜の煮浸しや天ぷらなどお手のものだった。それがいつのまにか自分のために調理するのが面倒になり、料理の勘はすっかり鈍ってしまった。

食べ物の中身が貧しくなると、戦中戦後のひどい食料事情を思いだす。なにしろ配給されてくるのが動物の餌といわれた油の絞りかすの大豆だったり、小鳥の餌のすま粉や少しばかりのやけ米なので、調理するのも大変だった。カボチャやサツマイモの葉や木の葉やタンポポなどの草を入れ、そこにすま粉でつくった団子を入れたすいとんを作って食べた。味つけの塩も、山塩のガリガリを石でこまかく砕いたものを使った。十日に一度ぐらい豆かすや、やけ米が配給されるのが待ち遠しかった。芋類でようやくと生き延びることができたのだが、それを調達するのが大変だった。空襲の最中でも近郊の農家に食料の買い出しに行く。しかし物々交換なので上等な着物などを求められた。

花枝は母親の遠縁を頼って桜木町から二宮までよく買い出しに行っていたが、なにがしかの食料を手に入れるまで歩きまわる乞食に等しい姿は惨めだった。なにしろ農村も食糧統制が強く取り締まられ、自家用米を除いては販売ルートに乗せなければならなくなったのである。

戦争が終わっても食料事情は悪く、上野では日に五、六人、横浜でも二、三人



は餓死者が出るという有様だった。敗戦の混乱で、配給といういままでのやり方もうまく機能しなくなってしまう、占領軍の采配となった。したがって占領軍が承認しないかぎり、物資の移動が禁止されたので、国民は食料が手にはいらず、空腹と飢餓にひんしたのである。

米軍がゴミ箱に捨てた残飯が、人々の飢えを満たした。じゃが芋の皮、パンやスープなどの食い残しを基地出入りの業者から仕入れ、闇市の食べ物屋が雑炊を作り、どんぶり一杯十円ほどで売りさばいた。不衛生などと思うより、貴重な栄養食と人々は喜んで食した。

市民は配給品だけではとうてい賄えないので、買い出しに明け暮れるのだが、それも戦時中の苛酷な取り締まりが改められるどころか、物資移動禁止令によりますます厳しくなった。駅やホームには移動監視のための警察官が見張っており、見つければ食料品は即没収された。運よく列車内での没収を免れたとしても、到着駅で警官隊が待ち受けており、一斉に持ち物検査をした。そんなときは、みな荷物を放置して逃げる。つかまればそれなりの罰則が課せられるからだ。飢えた家族のために、死にものぐるいで手に入れた食料を破棄しなければならない心情は、あまりにも酷だった。

横浜空襲で母親きぬが死亡してからは、花枝が父親と弟の世話をしていたので、買い出しを厭うわけにはいかなかった。母親がいなくなったからなのか二宮の縁者すら、

「このところ供出の割当が厳しくてね。供出金は安くおさえられたままだから、百姓は生活していけない、リヤカー一台を求めるのにも約六反の米がいるし、肥料、農機具、作業衣なども耕作物が求められる。都会の人にせつつかれても米や野菜は、自分らの食べる分さえ不足しがちなんだ」

と、米や野菜をわけてくれなくなった。そんなある日のこと、相模原まで買い出しにでかけ、ようやくと父親の知人の農家からカボチャとサツマイモをわけて貰った。空襲で家が焼かれたので、物々交換したくても着物の類いは焼失していた。幸いなことに父親が長年勤務していた工場から、地下足袋、手袋、作業着などが配給された。それらを持参して野菜類を手に入れ、リックサックに詰めて肩にかけて駅まで歩いた。重い荷物も家族の空腹を満たすためならばと懸命に足を進めるのだが、行く先々で移動監視のために警察官が配置されているので、油断はできなかった。

列車は買い出しの人で溢れ、屋根や機関車のまわりにかじり付く有様だった。それでも花枝は見知らぬ中年の男性に助けられ、窓から列車に乗ることができた。なぜかホームにも車内にも、監視の警察官の姿がなかった。今のところ荷物を没収される心配はないと思うと、少しばかり気がゆるんだのか眠気に襲われた。眠るまいとしてもいつしか深い眠りの底に落ちていった。目を覚ましたときは、抱

きかかえていたはずのリックサクがなくなっていた。盗まれたと気づいても、もはや打つ手はなかった。そのときの無念さ、悔しさは生涯忘れることができない。いまでもあの日の絶望感は、ひりひりとした痛みとなって蘇る。

花枝は茶碗から炊きたての白いご飯を箸でとり、口に入れてゆつくりと咀嚼する。美味しい、いつも思う。温かな米の食感、何年たっても飽きることがない。あの飢餓の時代に夢にみた白米を、なんの苦もなく毎日食べられる有り難さを噛み締める。平時しか知らない人には、とうてい理解し難い感覚だろう。

卵を手にとり、小鉢に割り入れる。戦前のまだ食料事情のよいときですら卵は貴重な品で、病気見舞いには米のすくもをつめた紙箱に卵を入れて持参したものだ。風邪など患ったときなどしか、卵かけご飯も食べさせてもらえなかった。花枝にとつてはいまでも、卵かけご飯がなによりのご馳走なのだ。醤油を卵にかけご飯の上に垂らし、箸で丁寧にかき混ぜる。黄色に光る卵は、なんとも美しい色をしている。

チャイムが鳴る。こんな時間に誰だろうと不審に思いながら、玄関のガラス戸を開ける。

「お早うございます」

そこに立っていたのは町内会役員の、初老の女二人だった。

「お早うございます」

花枝も儀礼的な挨拶をしたが、女たちの表情は言葉とはうらはらにどこか冷ややかなものがにじんんでいた。

「なにか」と尋ねると、

「あなたが、ゴミの集積所から、お鍋を持ち去られたと聞いたのですが」

咎めるような声が耳に届く。町内会でなにかと町民の世話をやいている七十すぎの白髪の女が、疑い深い視線を向けた。

「いけませんか」

相手に抗う言葉が、口を突いて出た。

「やっぱり」

と傍らのエプロン姿の細身の女が、薄ら笑いを口元に浮かべて言った

「集積所に出されたものは、捨てられた物でしょう。持ち帰ってもかまわない

と思いますけど」

「いいえ。無断の持ち帰りは、軽犯罪なんですって」

「そんな無茶な。どうせ始末してしまうものなのに」

「あなた、せんだつても集積場に置かれた傘を持ち帰られたでしょう」

「まだ使える傘を捨てるなんて、もったいないです」

花枝は強い口調で言い返した。戦中戦後の物のない時代、傘はとても貴重で物々交換では値打ちがあった。戦後のことだが、雨が降ると学校を欠席する児童

が増えた。それは傘がないからだ。傘の骨が折れれば修理屋に金を払い、直してもらって使った。集積所に捨てられていた傘は、そんな傘とはくらべようもないほど立派で、強風に煽られてすこしばかり歪んでいたりと、色があせたものだったりでまだ十分に使える品だった。

「あなたが集積場からゴミを持ち去られるので、ご近所の方々が心配なさってるんですよ」

「心配って」と花枝は不審げに問う。

「奥さんはご高齢でいらつしやるから、もしかして認知症になられたのではないかと心配しているんです。失礼でしたらご免なさいね」

エプロン姿の女が、そう説明した。

「この頃テレビでよく放送しているゴミ屋敷の話、ご存じだと思いますけど、あの屋敷の主も集積場から品物を拾ってきため込んだそうですよ。近隣が迷惑をこうむっていて、先日もゴミ屋敷からの出火で、隣の家が燃えたという報道がありましたでしょう。ですからお宅もそうなるかと困ると、皆さん気にしているんですよ」

「そんな」と口ごもったものの、花枝は白髪の女の言い分に憤りを覚えた。

「わたくしは明治女の母親から、掃除は厳しくしつけられております。家の中は綺麗に掃き清めて暮らしております。なんでしたらおあがりになって、お調べになってください」

とまくしたてずにはいられなかった。

「それでしたらよろしいのです。今朝持ち帰られたお鍋、元にお戻しになってください」 白髪の老女は、命令っぽく言った。

「捨てられたものを持ち帰って、最利用するのがいけないんですかね。ものを大切にするのは、いいことじゃあないですか。戦争中は家で使っている鍋釜も、武器製造のために供出させられたんです」

鉄類はむろんのこと白金や金属地金なども兵器資材として供出を強要され、従わなければ国家総動員法違反として罰せられたのである。一死一艦を屠る殉国神風特攻隊勇士が、待望する兵器を作るための供出だと、警察署経済保安課は豪語した。

「時代が違いますよ。戦争中のことを持ち出してもしようがないでしょう。今は今のやり方があるんですよ」

「そうですかねえ。まだ食べられるのに、賞味時間が過ぎたからって、コンビニなんかで食品を始末するでしょう。主婦も買いだめして腐らせた食べものを、平気で捨てる。罰当たりもはなはだしい。飢えたことのない人たちの、思いあがりです。戦後餓死した年寄りや子供がいたことは、ご存じでしょう」

花枝は女二人に向かって、鋭い言葉を投げかけた。

「そんな話をするために来たんじゃないやありません。あなたが集積場から物を持ち帰らないよう、お話しするために伺ったんですよ。町内会の決まりをぜひ守ってください」

花枝には目の前にいる初老の女たちが、もんぺの上に白い割烹着を着た戦時中の隣組婦人会の人たちの姿と重なって見えた。婦人会でも「一億一心」「協力一致」といった銃後のスローガンを掲げ、出征兵士に贈る千人針の腹巻きや慰問袋造りに狩り出された。あちこちに恐い人たちの目が光っていて、手伝わなかったり手抜きをすると戦局に非協力だと見なされた。また戦局に不利な発言や不埒なことを口にした者は、引つ張られてどこかにぶちこまれた。したがって隣組婦人会の女たちの目も、注意せねばならなかったのだ。

「お鍋を捨てられたのはどなたでしょう」

「中村さんですが」

「それでしたら中村さんにお話しして、お釜を譲っていただければよろしいんですよ」

「まあ、それはそうですが」

白髪の老女は、不快げな顔つきで答えた。

「ではそういたしますので」

花枝は集積場から持ち帰り、上がりかまちに置かれたままになっている鉄製の鍋に視線を注ぐ。古びた鍋は底が錆びていたが、鉄でできた品らしい重量感があり、使い勝手がよさげである。集積場に捨て置かれた鉄鍋を見た瞬間、花枝の脳裡には七十年前の鮮やかな記憶が甦った。

昭和二十年五月二十九日の横浜空襲の朝、空は五月晴れで天候はきわめて穏やかだった。当時一家は野毛山公園の入口近くに住んでいたのだが、家は焼夷弾の爆撃を受けて全焼し、一人残っていた母がP-51戦闘機の機関銃掃射を浴びて死亡した。その日、父聡



は市内杉田にある航空発動機製作所に出社し、旧制中学二年の弟も学徒動員で新子安の自動車工場に出かけていた。花枝は勤めていた川崎のメリヤス製造工場に向かう途中で、敵機の襲来に遭遇したのである。

空襲警報が鳴り出したそのとき、ちょうど横浜駅のホームに止まった電車に乗

っていたのだが、駅のアナウンスが警報発令を放送して、乗客に速やかに避難するよう呼びかけた。電車からホームに降りた乗客は、駅構内から地下道に進む人や、駅前の正面へ駆け出す人などさまざまで、みなどう避難すればいいのかかわからずやみくもに行動した。頭上にはすでに敵機の編隊が爆音を轟かせて通過していく。B 29の不気味な機影がはつきりと見え、恐ろしさに足がすくんだ。だがそれも束の間のもので、まもなく激しい音とともに焼夷弾が地上めがけて落とされ、あちこちに火柱があがった。花枝は急いで各ホームを連結している地下道に伏せ、しばらくじつとしていたのだが周辺は炎が渦巻き、熱風が吹き荒れてここにいるのは危険な状態となった。

駅構内から飛びだして駅前広場に出たが、勢いよく火が燃えさかり、黒い煙があたりに充満して息ができないほど苦しい。一緒に逃げてきた数人のほとんどは学生らしい若者たちで、あまりの恐怖に青ざめた顔をしていた。広場の先に防空壕があり、その入口で国鉄職員の制服を着た男性が、
「この防空壕に避難せよ」

と大声で叫んでいた。乗客はその呼びかけを聞き一目散に防空壕に向かつて疾走し、中へ転がり込んだ。それは天蓋のある防空壕だったが、焼夷弾の威力はすさまじく、天蓋さえもつき破って落下し炸裂した。国鉄職員は火を消そうと飛び散った火の塊に砂をまいたり、靴で踏みつけたりしたが消すことができない。乗客たちも防空ずきんで叩くのだが、火の勢いはますますばかりだった。危機感を覚えた乗客たちは火消しを断念して、ふたたび壕の外へ出た。

黒煙が広がっている広場は真昼とは思えないほど暗く、垂れ込めた靄の下には人が大勢うずくまっていた。行き場のない乗客たちは、遮蔽物のない広場の空間に身をひそめるしかなかった。爆音を轟かせながら次々とやってくる敵機は、たえまなく焼夷弾を投下する。天空から舞い降りてくる熱風が吹き荒れた。風はトタンや看板、木材やバケツなどなんでもかんでも巻き込み、凶器となって人々を襲った。

頭から血を流して死んでいる国民服の男の無惨な姿を目にし、花枝は身震いした。自分もそうなるかもしれないという恐怖に怯え、ここでは死にたくない、なんとしても生きのびねばならないと自分に言い聞かせた。しかし炎と煙の中を逃れようもない。それでもこれ以上広場に留まることはできないと判断し、意を決して駅から遠ざかることにした。西口の駅から木の橋を渡って通りにだが、両脇の建物はことごとく焼失しており、まだくすぶりつづけていた。電柱にはちぎられた電線が垂れ下がり、行く手をはばんだ。

煙を吸い込まぬよう手拭いを口に当て、地面を這いながら少しずつ進むしかない。あたりには煙が充満しているのだが、地表にわずかばかりのすき間があるので、できるだけ顔を伏せて息をした。ようやくと国道に出て、とにかく我が家の

ある野毛山方面に向かい、行けるところまで行こうと歩きだしたのだが、敵機はきわめて低空で飛来し、通行人を機関銃で狙い撃ちしはじめた。人々は悲鳴をあげ、あわてて側溝に身を伏せた。見あげると、翼と胴体に星のマークが描かれた飛行機は銀色に輝き、ゆうゆうと海岸方向へと遠ざかっていった。けれど敵機は一団が去ると、すぐに別の一団が飛来し焼夷弾の雨を降らせた。

火焰の直撃を受けた黒こげの死体が、行く先々道路の両側に横たわっていた。ほとんどが顔を地面につけ口に手を当てているのを見て、さぞ苦しかっただろうと思わずにいられなかった。建物の軒先に置かれた防火用水には、頭を突っ込んだまま死んだ遺体があちこちにあつた。火がついた衣服を濡らそうと、ようやく防火用水にたどりつき、そこで息絶えた人たちの姿が目突きささった。これが現実の出来事と受け留めるには、あまりにも苛酷な光景だった。

側溝に伏せ機関銃の攻撃を回避し、空襲がおさまるのをじっと待った。やがて焼夷弾の落下が止み、あたりが急に静かになった。耳をつんざくB 29の爆音もと絶え、煙のあいまから青い空が垣間見られた。警報解除のサイレンを聞き、死なずにすんだという一抹の安堵感を覚えたものの、すぐに家族は無事だろうかという不安に苛まれた。一刻も早く家に戻りたいと願っても、電車の運行も止まっているので歩くしかなかった。路上には焼夷弾から噴き出した液体が燃えているので、歩行は容易ではない。それでもあちこちに待避していた人達が、くすぶつている路を懸命に歩いていく。アスファルトが熱で溶けて靴の裏にくっつき、足がとられて歩きにくい。長時間の歩行はとても無理だと思い、ぼんやりとたたずんでいた。

どれほどの時間がたったのか分からないが、桜木町方面にゆくトラックの荷台に乗せてもらうことができた。荷台には被災者たちが数人いたが疲労困憊した様子で、どの顔もすすで黒く汚れ、血だらけの人や頬が火傷でふくれあがっている女性もいた。痛みを耐えているのか、みな無口で固い表情をしていた。

トラックに便乗できたのは天の助けだと感謝しながら、桜木町駅前で荷台から降りしてもらい、実家のある野毛山公園に向かつて足を進めた。駅前から野毛山方面は焦土と化し、街そのものが消失していた。瓦礫が散乱した路上には、首や腕や足のない死体が無造作に転がっていた。ほとんどが髪毛を焼かれた坊主頭で、男女の区別もできないほど焼け焦げていたし、手足の先端は白骨化している。街は戦場であり、火葬の竈場そのものだと思えるしかなかった。一瞬にして人としての営みを断たれ、命そのものを奪われた者の無念さはいかばかりであろう。死んでも死にきれぬ思いであろう、と花枝は念仏を唱えながら、遺体を踏まぬようにと気づかいながら歩いた。今は祈るしか、自らの心を鎮めようがなかったのだ。

ようやく野毛山公園までたどり着いたが、あたりの様子は一変していた。野

毛山から元町のトンネルまでの広い範囲は焼け野原と化し、建物が消え失せた市内は遠くまで見わたせた。公園の上まで登って行くと、青々と繁った美しい樹木が燃え、真つ黒に焼け焦げた大木がつつ立っていた。草木豊かな公園に避難すれば助かるに違いないと、四方から大勢人が押し寄せ、そこに無数の焼夷弾が落とされたのだ。

我が家の在りかを探したが、それらしきものを見つけることができなかつた。

母はどうしただろうという不安につき動かされ、必死であちこちを歩き回り、覚えのある所にたどり着くことができた。家屋そのものは消えていたとはいえ、焼け跡には使い馴れた品々が残されていた。倒れた門柱にある門札からは名字を読み取ることができたし、空き地には家屋の土台が部屋の間取りを示していた。

焼け跡にはむきだしになった水道管があり、蛇口から水が吹き出ている。そのあたりは台所だったようで、母が大切に使っていた鍋や釜があつた。花枝は水道管に駆け寄り蛇口をひねつたが、破損しているので水を止めるのは無理だった。雑のうと救急袋や防空ずきんを肩からはずし、水を両手で受け顔を洗い水を飲んだ。すがすがしい気分が全身を被い、生きているという実感を噛みしめると、急に空腹を覚えた。昼食のことなどすっかり忘れていたのだが、でがけに母手作りの弁当箱を雑のうにつめこんだことを思い出す。



玄関の上りがまちに置かれていた踏み石を見つけ、そこに腰を下ろして弁当を食べることにした。アルミニウムの弁当箱は生温かく、蓋をあけると芋とご飯がぐしゃぐしゃにつぶれていた。ご飯まみれになった二本のメザシが作り手の精一杯の思いやりを伝えていた。配給が遅配がちなだけに、毎日家族の弁当をこしらえるのは大変だろうと有り難く思っていたのだ。

母はどこに避難しているのだろう、と弁当を食べながら行きそうな場所を考える。近くには隣組のこじんまりした防空壕のほかに、大きなそして頑丈に造られたものがいくつかあるので、そのどこかにいるに違いない。我が家では野毛山公園を避難場所としてみなが了解しており、そこが危ないようなら、近くの防空壕に行くようにと父が常々言っていた。今思えば公園は軍の野毛山高射砲陣地のある山のそばなので、敵の攻撃目標となっていただろう。今さらそう言ってもしよのないことだが、近隣の誰もが公園を格好の避難場所と、信じて疑わなかつたのである。

母の無事を確認しなければと、花枝はまず隣組の防空壕に向かった。公園の門前に数人の婦人がたむろしており、みな疲労困憊した様子で白い割烹着も黒ずんで汚れていた。近づいてみたが知らない人たちばかりで、隣組の関係者ではないようだった。野毛山公園に避難してきた近隣の住民だろうと、挨拶をせずに通り過ぎようとした。けれど女たちが目に涙を浮かべ、合掌して口々に経を唱えているのに気づき足を止めた。尋常とは言い難い難い光景に驚いてあたりを見まわすと、道路わきにもものかけられた遺体らしきものがあり、手向けの花が供えられていた。花枝も雑のうの中から数珠をとりだして手を合わせ、念仏を唱えた。先日会社関係の葬儀があり、数珠を持ち歩いていたのである。

「花枝さん」

背後から名を呼ばれはつとして振り向くと、そこに隣家の若奥さんがいた。

「あなたのお帰りを待ってたのよ」

奥さんは駆け寄ってくると、花枝の肩を抱きしめ、

「まつ子とおばさんが」と言っただけで泣き出した。その目は焦点がさだまらず、涙が頬を濡らした。

「まっちゃんとうちの母がどうかしたの」

「死んじゃった」

短いひと言が、鋭い刃物となって胸に突きささった。

「そんな」

花枝は絶句し、目の前が暗くかすんだ。

「防空壕前の空き地にいたところを、機銃掃射にやられたの。わたしだけが助かったらいい」

若奥さんは涙ながらにそう告げ、

「さあ、行きましょう。二人はまだ空き地にいるんです」と花枝の手を引く張った。現実起こった出来事だという気がしないまま、転がるように空き地へ足を踏み入れた。目にしたのは、あちらこちらに横たわるこもや毛布などを被せられた無数の骸だった。

「ここです。ここ」

黒こげの大木の下に歩み寄った若奥さんはその場に跪き、そつと毛布を持ち上げた。そこに並んで横たえられていたのは、母と幼い女の子の亡骸だった。覆った手拭いを取ると、まるで眠っているかのような穏やかな顔が現れた。

「焼夷弾にやられたんじゃないので、見た目は綺麗でしょう」

せめてもの慰めというように呟く声が虚しく、愛する家族の死を受け入れられない悔しさがにじむ。花枝は母の頬を手のひらで包み込み、優しく撫でつづけた。まだ温もりがかすかに感じられ、その死が信じられないのだった。途中出会った見知らぬ人の亡骸には、数珠を手に読経したのに、祈るということを忘れていた。

若奥さんの話では、最初はいつものように隣組の防空壕に避難していた。けれど空襲はこのほか激しく、防空壕にいたら蒸し焼きになるから外に出るようにという警防団の警告に従った。道を隔てたその空き地は、強制疎開で取り壊された家の跡地で、野菜が植えられていた。わずかばかりの空き地に、避難してきた人たちが持ち込んだ布団や毛布などが山と積まれ、そこに焼夷弾が落とされた。あたりは火の海となり、もうもうと立ちのぼる煙で息もできずに窒息死したり、衣服に火がついて大火傷を負った人など、多くの犠牲者が出た。

三歳になったばかりのまつ子を抱いて、若奥さんは防空壕から飛び出した。花枝の母親も一緒に空き地の片隅に伏せの格好のまま、時が過ぎるのを待った。けれどつぎつぎと飛来するB 29の編隊は、容赦なく焼夷弾の雨を降らせた。若奥さんは自分の背中に火がついたのでまつ子を投げ出し、土の上を転がりながら夢中で火を消した。自身は助かったのだが、そのわずか数分のあいだに、まつ子とおばさんが低空でやってきた敵機からの機関銃掃射を浴びた。あつという間の出来事なのに空き地には、機関銃に狙い撃ちされた遺体があちこちに倒れていた。若奥さんは半狂乱状態でわが子の遺体にとりすがって名を呼びつづけたが、もとより蘇生することはかなわなかったと歎く。

狭い道路と空き地には、いつも優しくしてくれた老夫婦と孫、配給など隣組の仕事を厭わずこなしていた奥さんと二人の子供、前の家のおじさんと娘さんなどの、親しい隣人の変わり果てた姿があった。数時間前までは戦時であっても、みな助け合いながら懸命に生きていたのだと思うと、悲しみよりも悔しさがつのる。空き地には、勤め先から駆けつけた隣組の人たちが、家族の亡骸を前に茫然と立ちつくす姿があった。花枝の父もその一人で、そばにいてやれなかったことをしきりに悔んだ。

時は容赦なく過ぎていき、日は陰り夕暮れが迫る。暗くなる前に亡骸を自宅に運びたいと、遺族の誰もが願った。警察署からは係官がやってきて遺体の身元調査と検視をし、死亡通知書は市役所にだされた。しかし運搬に必要なリヤカーの手配がままならず、みな頭をかかえた。隣組に保管されていたリヤカーはことごとく焼け、タイヤがひつつぶれているので使い物にならない。タイヤのないリヤカーや戸板で運ぶ家族もいたが、力仕事なので容易ではなかった。やがて警察や警防団の奔走で、使い古した一台のリヤカーが届き、遺体の搬送はとどこおりなく終わった。

警察の話では、久保山の火葬場は満杯状態なので数日は待たねばならない。その間に遺体は腐敗するので自宅で茶毘にふすか、久保山に憲兵が掘った穴に埋葬するしかないのだという。隣組のほとんどの家では、自宅の庭で火葬することになった。花枝も父の意向に従い、その準備にとりかかった。

「晃はまだ帰ってこんのか」

新子安の自動車工場へ学徒動員で出かけた息子の安否を、父親は心配してなんども尋ねるが、もとより答えようもないことなのだ。それでも父の不安感を除こうと、

「たぶん新子安の自動車工場についてから空襲になったでしょうから、それなりの備えのある大工場だから避難して無事だと思うわ」といつた返答をした。

その夜奇跡的に焼け残った隣家の防空壕の中で、若奥さんとまつ子の祖父母、それに隣近所の遺族が集って、共同の通夜を営むことになった。もとより供する物はなく、ほとんどの人が空腹状態なのにそれさえも自覚せず、ただひたすら亡き家族の冥福を願い、弔いの時を過ごす。隣組の人から頼まれて、お坊さんが線香持参でお経をあげにきてくれたので、一同の心は和んだ。花枝もお坊さんと一緒に南無阿弥陀仏と経を唱えることで、自身が救われる心地がした、

二、二本のローソクの火がわずかに照らす暗い壕の中で座りこみ、遺族たちはなにも話そうとはせずみな無口だった。時おり代わり番こに壕の外に出てゆき、自宅に安置した遺体を確認した。外は霞みのかかったおぼろ月夜で、空襲の激しい騒音が嘘のような静寂があたりを支配していた。

「お姉ちゃん」微かにそう呼ぶ声を聞き、声のする方に視線を向けると、そこに弟晃の姿があった。

「お帰り」

そう言ったきり言葉が詰まった。心配する父をなだめてはいたが、横浜駅で受けた爆撃のすさまじさから、なかなか帰宅しない晃が、もしや焼夷弾にやられたのではないか、機関銃に狙い撃ちされたのではないかと案じ、ひたすら無事を祈っていたのである。

「こんなに遅くまで、どこでなにをしていたの。心配してたんだから」

多少興奮気味に言いつのる。

「中型爆弾が工場に直撃して、死人や怪我人が大勢出た。僕も飛んできた破片が頭に当たったけど、この鉄鍋のお陰でぶちぬかれずにすんだんだ」

晃は手にした鉄鍋を高々と持ち上げ、いつもの快活な笑顔を見せた。説明によると空襲警報が発令され避難するとき鉄鍋を拾い、なかば真剣になかば冗談に鉄兜がわりに頭に載せた。軍需工場なので敵機は爆弾を大量に投下し、見る見るうちに火の手が上がり、激しい爆発音が響きわたった。友達の何人かは大怪我をして病院に運ばれたが、目などやられて一人では帰れない者を、みんなで手分けして送り届けたということだった。

「心配させてご免。ここまであがってきたら、家がなくなってたからもうびつくり。それで親父とおふくろは」

そう問われた花枝は、晃を毛布に包まれた母の亡骸の前に連れて行った。

「お母さんは仏さまになられたの」

覆いの手拭いを取り除くと、月の光にさらされた母のデスマスクが現れ、「お母さん」と呼びかける晃の悲痛な声が響いた。

翌五月三十日、五月晴れの朝を迎えた。穏やかな陽光があたりに満ち、野毛山公園の上空には優しい風が吹いていた。

「空襲にならないうちに、おんぼやきをしなければ」

壕で一夜共に通夜をした隣近所の人たちは、寝不足で疲れきっているのに自宅での火葬の準備をした。

花枝一家も隣のまつ子の家でも、焼け跡の庭に穴を掘る作業を始めた。焼けて歪んだスコップでは、なかなか深い穴が掘れない。弟の晃が懸命にその作業をこなす。父親に慰められ、なんとか母の死を受けとめたようだが、昨夜は寝ずに亡骸に寄り添ってすごした。配られたカンパンも食べていなかった。

戦地で兵士の火葬を担当したという老人の指導のもとに、まず焼けぼつくりを井桁に積み重ね、その上に廃材や焼け残った木片を並べた。あちこちから木の枝なども集めるのだが、昨日の空襲で野毛山一帯は焼け野原と化したので、そう容易く見つかるはずがなかった。その上空襲があれば作業を中断しなければならぬから、時間との闘いでもあった。幸いなことに、町内会の知り合いが、強制疎開で取り壊された家の廃材を保管していた。乾燥した大ぶりの古材は良質な薪なので、火葬には最適だった。

供された木片をやはり井桁に並べ、母の亡骸をそこに横たえた。庭に埋めておいた衣類が焼けずに残っていたので、新しい浴衣を遺体にかけることができた。すべての準備が完了し、父は真剣な面持ちで薪に火をつけた。炎はだんだんと勢いを増して燃えつづけ、火柱が勢いよく上がり、どす黒い煙が四方に流れていく。なんとも凄惨で哀しみに包まれた光景だった。

通夜で経をあげてくれた僧侶がやってきて読経し、何とか骨壺を用意するから待つようにと伝えた。父は窪んだ頬をほころばせ、丁寧に礼を述べた。物が極端に不足していたし、空襲で多くの死者がでたから骨壺を調達するのは難しかった。しかたなく厚紙の箱に遺骨を納めたり、庭にそのまま埋葬する人もいた。決してまれなことではなかったのだ。

母の亡骸は勢いよく燃え上がった木材の灰の中から、とても綺麗な遺骨となつて家族にゆだねられた。自宅の焼け跡で肉親をおんぼやきにする、そんな残酷なことができるのかと花枝は悩んだ。けれど空襲のさなかに避難した道すがら、あちこちで目にした情景が脳裡に刻まれている。真っ黒に焼け焦げた死骸は、ただいくつかの焼けぼつくりのように路上に転がっていた。それに比べれば、まだ許される気がした。隣の若奥さんと舅姑、隣近所の遺族たちも、自分自身の手で

家族をおんぼやきにすることを歎いた、すべてが戦時下の出来事だと、あきめるしかなかった。

花枝はゴミ集積所から拾ってきた鉄鍋に視線を馳せ、弟の晃が手にしていた鉄鍋そっくりだと思った。鉄鍋を鉄兜がわりにかぶっていたので、焼夷弾に頭をぶちぬかれずにすんだと、晃は嬉しげに話した。母の通夜と重なり、弟の笑顔は忘れ難い思い出だった。

「それから布類も沢山持ち帰られるという苦情がきていますけど、そうなんですか」

「雑巾になるシーツやタオルをいただいで、布をきれいに洗いましたね。雑巾を縫って、老人ホームに寄付してます。それも罪になるんですかね」

花枝の剣幕に恐れをなしたのか、返事をせずはぐらかすように、

「あなたは高齢のひとり暮らしなのに、町内会の災害時援助依頼を拒否しましたね。なぜなんですか」と白髪の女が尋ねた。

「自分のことは自分でできますし、いざというときは隣町にいる甥や姪がかけつけてくれますので」

「災害時はそうだとしても、高齢者の孤独死が問題になっています。病死して何日も気づかれずに、遺体が腐敗するケースが増えていきますから、町内会の皆様が高齢者のひとり暮らしを心配されるんです」

エプロン姿の女のしたり顔が我慢できなくなった花枝は、

「あなた方はきれいごとを並べたてていらっしやいますけど、腐敗した遺体を自分で見たり、始末したことがありますか」と強い口調で問い詰めた。

横浜空襲の凄惨な光景が、いまだに忘れられず脳裡にこびりついている。久保山の円覚寺の境内に百五十体もの骸が並べられ、半焼きになった屍体、完全に焼けて白骨化した屍体、蒸し焼きなつて膨れた屍体、性別も分からぬ屍体があった。親しい知人の親探しにつきあつた日の光景は、地獄そのものだった。高齢者の孤独死など、あの酷たらしい死にくらべたら、安らかではないか。いくら腐敗したといっても火葬場に運ばれ、遺骨となつて骨壺に収められる。円覚寺に横たえられたそれらは、ひきとりでもなく憲兵が掘った穴に埋められるのだ。

我が家の焼け跡でおんぼやきにした母を偲ぶとき、花枝は悔恨と悲しみの念にとらわれずにはいられない。

町内会の女性たちは、不愉快げな顔をして帰っていった。

了